人文科学研究所

Institute of Humanities, Human and Social Sciences

過去、現在、未来の〈地平〉を融合し、新たな社会を批判的に創造する人文・社会科学の拠点

歴史、哲学・文化、地域・グローバルの研究領域に注力
未来を見据え、新たな可能性を秘めた「人間の学」を追求する

人文科学研究所は、1948年の発足以来、学内外の研究者を組織し、人文・社会諸科学の学際的共同研究を推し進め、その成果を社会に還元する取り組みを積み重ねてきました。今日の世界は、貧富の格差の増大、民族・地域紛争、飢餓、差別の広がりなど人間の尊厳や生存条件を大きく阻害する深刻な危機に見舞われています。

そのような状況のなか、本研究所は未来を見据えた研究に取り組んでいきたいと考えています。そのために、学内外の研究者の豊富な研究蓄積と旺盛な問題関心に積極的に目を向け、未来を担う若い世代の研究者の斬新な視座やイマジネーションを最大に生かしながら、あらたな可能性を秘めた「人間の学」を追求していきます。

Cultura animi philosophia est.

魂をつちかう
―それが人文知

Cicero, *Tusculan Disputations*, 2.5.13.

現代では経済的格差の拡大、内戦・民族紛争の深刻化など、人間の尊厳や生存の条件を脅かす事態が奥深く進行しています。そのため、これに対抗しうる「知」が今ますますもとめられています。

立命館大学人文科学研究所は、「Cultura animi philosophia est」というキケロの言葉を「統制的理念」（カント）すなわち「高々と掲げるべき旗」としながら、人文・社会諸科学における知の刷新と変革を牽引する拠点でありたいと願っています。

本研究所は、立命館大学はもちろん、日本、アジア、世界における人文・社会諸科学の刷新（イノベーション）と変革を牽引するフラッグシップの役割を担い、その研究成果を世界へ向けて発信するプラットフォームとなることを目指します。

その際には、若い世代の研究者の参加を積極的に促しながら、学内外においてネットワークの「多様体」を形成し、研究成果を蓄積していきたいと願っています。

研究所としての活動

本研究所では、「歴史研究」「哲学・文化研究」「地域・グローバル研究」の3つの研究領域を重視し、研究活動を行っています。それぞれの研究領域による活動は、研究会やワークショップによるものや、刊行物（『立命館大学人文科学研究所紀要』『立命館大学人文科学研究所研究叢書』等）によって、その成果発信を行っています。また、「人文科学研究所助成プログラム」では、新たな研究分野を開く萌芽的な研究に関して支援を行っています。

シンポジウムのテーマ例

- 『うつむく眼』と間文化性 ―21世紀における視覚の行方
- グローバル化時代のナショナリズムと民主主義
- ジェンダーと身体
- 荒川修作＋マドリン・ギンズの現在：哲学と創造性
- 移動論的パラダイムの新地平
- 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）以後の観光研究
- AI以後の人文・社会科学を問う
- COVID-19以後のモビリティ研究　など

シンポジウムの開催実績

助成プロジェクトの紹介

- 自由民主政の体制原理の再検討：ローカル、リージョナル、グローバルな視点からの国民国家の理論と動態の考察
- 携帯電話端末の普及が新興国社会に与える影響の研究
- 民衆の生活・文化からみた日本の中世社会と、現代へのつながり
- アーバンスポーツと都市の景観開発、都市政策、観光政策をめぐる社会学的研究
- グローバル・ヒストリーから見るパンデミック（危機における移動の学際的研究）

紀要特集・小特集テーマ例

- あたらしい日本近現代史研究の模索
- 日本近代国家の基底と外縁
- 間文化性と宗教
- デリダ―歴史の思考と言語の問い
- 「ダークツーリズム」研究の拡張―「ポリフォニック・ツーリズム」研究に向けて―
- 人文科学における観光研究
- 「グローバル化のなかの東アジア」研究会成果報告
- 「グローバル化と公共性」研究会の成果報告
- 交流と再生の地、京都：〈よみがえりの都市〉としての相貌

立命館大学
人文科学研究所紀要を刊行

研究所長：亀井 大輔（文学部 教授）
主な研究拠点：衣笠キャンパス
お問い合わせ：立命館大学 研究部 衣笠リサーチオフィス内 人文科学研究所事務局
TEL：075-465-8225 FAX：075-465-8245 ✉：jinbun@st.ritsumei.ac.jp　http://www.ritsumei.ac.jp/research/ihhss/